

# 共通教育における持続可能な社会を目指す体験型学習

大橋 眞, 斉藤隆仁

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

## 1. 背景

2002年に開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」において、持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)の必要性が提唱された。ESDは、持続可能な社会を築くために「環境、貧困、人権、平和、開発などの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動」としている。地球の資源が有限である以上、これまでのような消費を続けることは困難であることは明白である。そのために、持続可能な社会を考えることを、教養教育の重要な柱とする必要がある。

## 2. 取組について

徳島大学全学共通教育では、教養科目と社会性形成科目を中心として、ESDとの関連付けをおこないながら、教育の改善を行ってきた。体験を重視する授業を共創型学習というカテゴリーにおき、地域社会人と学習グループを作ってお互いに学び合う形式の授業を実施して、環境に関する体験型の課外学習の機会を設けている。ESDにおいては、自然の営みの中から、何を学ぶ事ができるのかという問いかけから、自然と学習者の間での双方向的やりとりが重要な役割を果たすとされている。このような観点から考えると、自然の営みと、人間の生活が一体化したような伝統文化の中に、ESDに必要な知恵が蓄積されていると考えられる。また、近年のグローバル化社会に対

応するための人材育成が急務の課題となってきた。そのために、共創型学習においては、活動の基本を地域社会人や海外の学生と共に学ぶ体験型学習を実施することに重点を置いている。

ESDに関連するグローバル社会の体験型学習として、モンゴル、タイなどへのスタディツアーを実施している。また、スタディツアー報告会を実施して参加した学生から学習の成果を、他の一般の学生や大学教育に参加している地域社会人に伝える機会を設けている。参加した学生にとっては、活動を振り返りながら、次の学習の発展を考える機会になっている。さらに、定期的に市民シンポジウムを開催して、持続可能な社会に関連する自然栽培の取組や、伝統文化を見直す取組事例などを紹介して、持続可能とは何かということ、地域社会の仕組みと関連づけながら考える機会を設けている。このシンポジウムでは、それぞれの取組をリードしている市民がシンポジストであり、シンポジストを含めた地域社会人と学生が共に学ぶ場を設けることにより、学生の能動的な学びにつながりやすい環境を作ることを目指している。

サステナビリティの理論を考えるために、日常生活をベースとした体験型が必要である。共同生活などの生活体験による学習者の気づきを基本として、その発展系として自らの理論を構築し、その理論を確かめるために実践をおこない、理論の修正をしていくような、実践的な理論構築の仕組みと修正を含めた自己完結のサイクルを創り出す試みが必要である。自らの考え方を拘束する自身が抱いてきたこれまでの常識を見直すことにつながる行動を引き起こす仕組みを取り入れること

により、学習効果が高まることが期待される。このような学習プログラムを実現するためには、学習を共にする協力者が必要であり、学習者と異なった文化的背景を持つ共同学習者の存在は、学習者の常識を見直す上で極めて重要な意味を持っている。

### 3. 考察

一般的に人は、通常これまでの経験で培ってきた常識の範囲内で思考をおこなう。この常識の枠を超えて、枠の外から自分の常識を見直すことは困難であるとされている。このように、人間の思考回路には、常識という枠が当てはめられている。しかしながら、この様な思考回路の枠組みとしての常識は、ある条件下では見直されることがある。異文化との出会いとそれに関連する体験型学習は、学習者のこれまでの常識を見直すきっかけを与える。これまでの経験で培われてきた常識という自身にとっての価値観が、普遍的でないということに対する気づきにつながり、学習者自身の常識は、どのように位置付くのかについての思考や異文化交流に対する興味を引き起こすことが可能となる。その結果として、自身が長年抱えてきた常識の見直しをおこなう環境が作られるきっかけとなり得る。

このような自己変容モデルに対応できる柔軟な思考体系は、これまで自分が抱えてきた常識に捕らわれたままの価値観の範囲内では、育むことが困難である。自身を客体化して、これまでの歴史的な舞台の中での自身の立ち位置や、さらに現世を超えたような世界から自身の属する社会を見るような、視座の涵養が必要である。そのためには、自己と相違する価値観を持った社会に対してどう向き合いながら、どのように対応するのかという判断力を培う必要があり、その過程に於いて生じ得るさまざまな葛藤などを含めた感情を自己形成に生かすような学習態度が求められていよう。このようにESDの学習においては、現代社会システムの複雑モデルとの類似性を、より小さな自己完結型の社会の中で学ぶプロセスであると

言えよう。

現在の大学教育の多くは、いわゆる科学の理論である線形の思考に基づいておこなわれており、学問が細分化されていくという問題を抱えている。実際の社会では、非線形のシステムという形で思考をすることが必須となる、そのために、線形の思考とシステム思考の違いを対比して、生命の仕組みや社会現象のモデルに当てはめながら考察する機会を設けることが必要である。健康や病気に関する考え方についても、システム思考で捉えることにより、これまでのような線形の思考では把握できなかった視点から解決の方法を見いだすことが期待できよう。このように環境問題に関して、これまでの人間中心の経済活動により地球のシステムの不都合が生じた結果であるという考え方を持つことにより、これまでの経済至上主義から脱却して、地球と共生する人間社会の新しい形を探究するための教育に移行する可能性が開けてくると考えられる。

このように、教養を学ぶ学生が体験型学習において、異文化体験を含む社会における複雑システムを理解するための教育プログラムの充実がESDやグローバル化社会の理解に不可欠であり、このような視点をどのような形で取り入れるかが、今後の大学教育改革の課題であると考えられる。



「伝統文化から健康を考える」市民シンポジウム  
(徳島大学けやきホール)